

挿し木苗生産(九州)



挿し付け(4月)

参考:大分県山林苗規格
苗高:35~70cm
根元径:5.5mm以上



苗高:56cm

根元径



苗高:45cm

根元径

育苗中のスギ挿し木苗(11月)

左:300cc、右:150cc

挿し付けから7か月で出荷規格を十分に満たす苗に成長

当年生苗のメリット



- ・翌年の需給調整に対応出来る
(需要増、供給減の調整弁)
- ・残苗リスクの低下が見込める
- ・育苗コスト減が図れる
- ・スペース、資材の省力化
- ・繁忙期を避けた柔軟な出荷が可能

最後に

○実生苗生産スケジュール

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
		播種															
			移植														
				育苗													
												出荷					
																2年生苗	

○挿し木苗生産スケジュール

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
			挿しつけ														
				育苗													
														出荷			
																	2年生苗

出荷可能な性状となった苗でも出荷が出来ない？

(資料4-2)

令和2年度 流域山地災害等対策調査(森林保全対策調査)

低コスト造林の推進に向けた保安林の指定施業要件の在り方に関する検討委員会(第3回)

1.関係者ヒアリング資料 ②

岩手県における低コスト造林の取組

岩手県森林組合連合会
代表理事専務
澤口 良喜 様

令和3年1月14日(木)

令和3年1月14日(木)

岩手県における 低コスト造林の取組

岩手県森林組合連合会
代表理事専務 澤口 良喜

1

1 低密度植栽導入の経緯

(1) 業界全体として低コスト造林を推進

- ・大口需要に対応するため、再造林の促進が必要
- ・ H22に森林整備事業の最低植栽本数を引下げ
スギ2,000本/ha、カラマツ1,800本/ha→1,000本/ha

(2) 森林整備事業に低コスト造林を導入

H29に国の補正予算でTPP対策として導入

(3) 再造林を推進する「岩手県森林再生機構」設立

H30から低コスト造林を推進するため、森林整備事業補助金への上乗せ補助を開始

2

2 人工造林の現状

(1) 従来の植栽本数

スギ3,000本/ha、カラマツ2,500本/haが主流

(2) 再造林はカラマツに集中

- ・ 大型合板工場の進出によりカラマツ需要増大
- ・ カラマツ苗木の需要が急増

(3) 低密度植栽はH22ころから

低密度植栽推進のため、森林整備事業の採択要件の見直しを実施

3

3 低密度植栽の導入状況

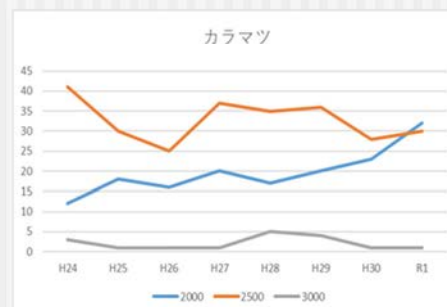
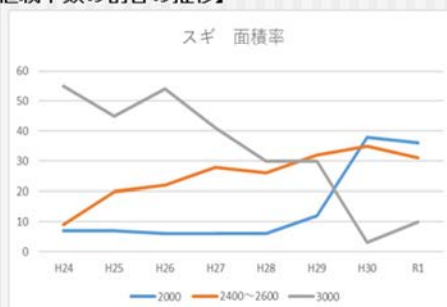
(1) 現在の植栽本数

スギ2,500本/ha程度、カラマツ2,000本/haが増加している

(2) 低密度植栽を始めて10年程度

10年間の実績を踏まえ、今後、更に低密度植栽の推進を図る

【植栽本数の割合の推移】



4

4 低密度植栽箇所の生育状況

(1) 生育状況

従来と比べ、生育の差はない

(2) 被害等の状況

従来と比べ、気象害等の被害の差はない

5

5 低密度植栽の適地

今までの状況から、岩手県では、施業地による低密度植栽の適・不適の差は感じられない。



【カラマツ1,900/ha植え】

6

6 保育作業と獣害対策

(1) 下刈り

全刈りが一般的であり、作業負荷に違いは見られない

(2) 除伐

- ・ 2,000本/ha程度では従来と大きな違いは見られない
- ・ 植栽密度は極端に低い場合、下層植生の成長が旺盛となり、作業負荷が増加する可能性は考えられる

(3) 獣害対策

防護柵が主流であり、作業負荷やコストの差はない

7

7 保安林と普通林での取扱いの違い

(1) 施業地ごとに植栽本数が違う

場所や樹種によって植栽本数が異なる

(2) 地域で一般的に行われている施業と違う

地域で行われている植栽は、カラマツよりスギの方が本数が多いのが一般的であるが、指定施業要件に基づいた場合には、カラマツの方が本数が多くなる

(3) 活用できる助成制度に制約がある

指定施業要件に基づく本数で植栽した場合、低コスト造林を推進する岩手県森林再生機構の補助が受けられない場合がある

8

8 普及体制

(1) これまで

森林組合等と林業普及指導員が連携し、補助制度を活用し、低密度植栽を推進してきた

(2) 今後

低密度植栽の経験や実績を積み重ねることにより、地域にあった造林技術として定着を図っていく

9

9 まとめ

- 森林組合等と林業普及指導員が連携し、森林整備事業等の補助制度を活用し、低密度植栽を推進してきた
- スギ2,500本/ha、カラマツ2,000本/haが主流となってきたが、現時点では、従来の植栽本数と比較して、成長度合や育林の作業負荷に大きな違いは生じていない
- 森林所有者は、保安林の制約については理解しつつも、隣接の普通林では可能な低密度植栽に保安林では取り組めず、森林経営上の制約となることに抵抗を感じている

10

10 課題

(1) 施業地ごとに植栽本数が違う

森林所有者の理解が得にくい

(2) 保安林の植栽本数が多い場合のコスト

普通林の造林コストとの差が大きい

(3) 地域で一般的に行われている施業と違う

施業要件の理解不足による手直し作業が発生

(4) 活用できる助成制度に制約がある

低密度植栽の補助が受けられず不公平

11

(資料4-3)

令和2年度 流域山地災害等対策調査(森林保全対策調査)

低コスト造林の推進に向けた保安林の指定施業要件の在り方に関する検討委員会(第3回)

1.関係者ヒアリング資料 ③

エリートツリーの開発とその普及

(国研)森林研究・整備機構
森林総合研究所 林木育種センター
育種第一課
倉本 哲嗣 様

令和3年1月14日(木)



エリートツリーの開発とその普及

(国研)森林研究・整備機構
森林総合研究所林木育種センター
育種第一課 倉本哲嗣

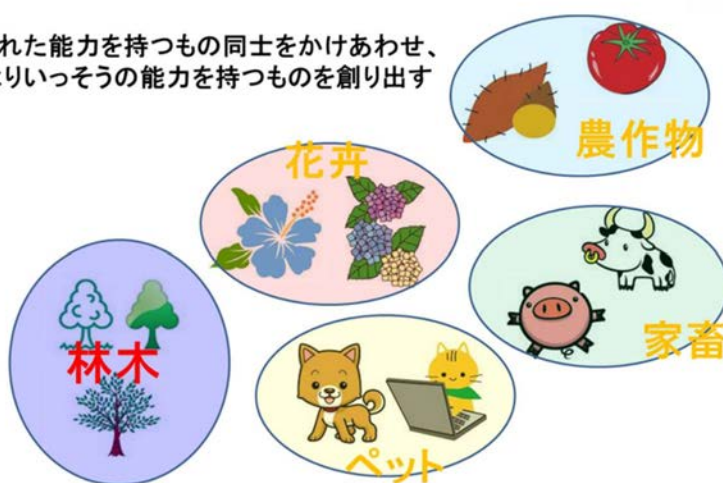
Forestry and Forest Products Research Institute

1



1. これまでの林木育種の流れ 身の回りの品種改良(育種)

優れた能力を持つもの同士をかけあわせ、
よりいっそうの能力を持つものを創り出す



Forestry and Forest Products Research Institute

12